



TITLE:

大英帝國の地理的位置

AUTHOR(S):

ボーン・コーニツシュ

CITATION:

ボーン・コーニツシュ. 大英帝國の地理的位置. 地球 1924, 1(1): 85-88

ISSUE DATE:

1924-02-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182624>

RIGHT:

大英帝國の地理的位置

ボーン、コーニツシュ

(スコツチツシニ、ジエオケラファイカリ、マガジン、第三十九卷所載、抄譯)

大英帝國の版圖は各大陸に跨り各大洋に界せられて、離れ／＼になつてゐるが相互の聯絡は確實についてゐる、英吉利本國から西方又は東方に、其領土が擴張されるにつれて、多數の海港がつぎ／＼に領有せられ。平時は勿論戰時に於ても他國の海港よりも遙かに有力に本國との聯絡を保ちつゝあるのである。例令ば大西洋上のバーミユダ島は本國と加奈陀及西印度との交通線上の要點にあり、この二地方と本國との間にこの航路を脅かす所の他國の港はないのである南太平洋の西門に於ては、フオークランド島があり、マルタ島の艦隊根據地は地中海に於ける二つの海面の中央に位して地中海航路を扼し、ジブラルタルの海港は地中海艦隊と本國艦隊と

の中繼場所であると同時に岬殖民地航路を保護してゐる、埃及に於ける英國軍隊の優越は容易く蘇士の運河を保護して安全なる外に、まさかの時には紅海を溯つて、この地峽を他に渡さない丈けの用意がある、それは埃及の東にバベルマンデフ海峽の中に英領ペリム島があり、アラビア半島のさきにアデンの港があつて衛戍給炭地になつてゐるからである。かくて本國と印度との交通は安全であるが、セイロン島のコロンボは英國の最東端である濠州と本國との間に立つ所の要港であり、シンガポールは印度と極東との間の要衝である。

更に本國から印度及濠州に通ずるにはシエラレオネ、セントヘレナ、マウリシアス等の英領

をはじめ南阿聯邦によつて有力に保護されてゐる、しかしてこの印度及本國、加奈陀及本國間の交通に對して佛國が介立してゐるほかに強大國にして其本國又は鐵道線を有するものはない、従つて大英帝國の重要な版圖たる加奈陀、英吉利、南阿、印度、濠州は太西洋及印度洋を通じて戰時、平時、いづれも確實に紐結されてゐると云ふべきである。が、しかし一方太平洋方面を見るとそうはいかぬ、布哇は最初英國海軍によつて世界に紹介されたものであるが、今日では米國の所有であつて、しかも米國の海軍の重要な根據地である、布哇の南西にあるフアンニング島は決して海軍に役立つ程の島でない従つて加奈陀と濠州との間の航路は一旦の際に安全とは云へぬ、たとへ米國と英國とは同種同文の好があるとしても、國際法上中立を守る日に於て米國は布哇を英國に開かぬことは丁度三年前に彼が英國及獨逸の何れにも役立てなかつたと同様であらう。布哇の外にバナマの地峽も亦英國の支配の下にないのであるから、英本國

とニュージラランドとの航路も亦英國民のコントロールの外であると云ふ事を知らねばならぬ。つぎに印度と加奈陀間の航路を見ると、これは地圖が示めす通り、北太平洋のアジア及アメリカの海岸は、ほゞ大圈に近い彎形をなしてゐるから、これは海岸に沿ふて通行するより外に最も短い航路は無いのである。従つてザアングバーより香港へ通ずる航路は、どうしても日本を横ぎらねばならぬのである、従つて戰時に於ける日本の態度といふものがこの交通上極めて重大な意義を持つのである。

そこで海軍根據地とか貯炭所とか云ふものゝ分布から見て大英帝國は太西、印度兩洋に於て結合するも、北太平洋に於て離れてゐると見なければならぬ、これは丁度普通のメルカトルの世界圖の如きもので多くの世界圖は中央に英國を置き太西洋及印度洋をついて描き、左の上隅は加奈陀、右の下隅は濠州と云ふ風に記されて太平洋が切れてゐる。かゝる世界圖の象徴するが如くポートサイド及ケープタウンの二ヶ所

にて二の大洋の聯絡されてゐるのが實に英國の東西二部に互つてゐる地理的狀勢である

今この地圖上に於て加奈陀太平洋鐵道の東端ハリファツクスから濠州鐵道の西端フリーマントル、の間に大圈直線を引いて見よ其線は蘇士に近い下埃及を横斷して大英帝國の幹線^{イデオグラフ}に従ひ、加奈陀、英國、印度、濠州の間の交通線をしめすこととなる。この線上に均齊を保つて一方に加奈陀があれば、一方に濠州あり、北に英國あれば、南に南阿聯邦があり、東に印度の有色人種があれば、西に阿弗利加の有色人種が住むといふ風に、この幹線によつて左右均齊に分布されてゐるのが英國の狀勢である。而してこの幹線の軸となるものは實に蘇士であつてこゝは單に海路の主要基點なるのみならず、印度及阿弗利加縱貫鐵道の聯絡點となる同時に、航空路の一大要地であるのである、かくして英國領の諸港は同時に世界各國の連鎖であるから世界大戰に際し同盟各國の共同動作に寄與すること甚大なるを得たると共に聯合國の敵對行爲を

完全に膺懲することを得たのであつた。

翻つて人種分布の上からこれを見ると英領加奈陀は新世界の白色人種と歐洲の白人との連鎖であり熱帶濠州は白人と有色人種の一大障壁である、濠州はもと無人と云つてもよい大陸であつたが英人がこゝに植民して白人の眞の別天地を開いたのであるが其の中心地は佛伊獨の三國を合した面積一億一千三百萬の人口あるに對して、こゝは僅に三百萬の人口しかないのであるが、この大陸の附近には亞細亞の季節風地方がある、世界の人口十六億五千萬の中白人は五億で、残りは有色人種であるが印度、印度支那、支那、日本等の季節風帯には凡八億の民が住んでゐる、しかもこれらの國中で尤も遠い日本からタウンズビルに達する航路は同じ濠州のフリーマントルからタウンズビルへ達する沿岸航路とあまり差がない程近いのである。其他の國からは猶更近い事は言を待たないのであるがこれら人口稠密の國に對し英國は飽く迄白人濠州の位置を保たなくてはならぬ。有色人の入國を

許したならば恐らく濠州の歴史を破壊し濠州人の子孫のためにも宜數からぬ結果を招くであらう。蓋し亞細亞人はアジアに於て活動すべきである、支那に於ける人口過多の弊は支那に工業が起らないからであるが、將來支那が工業國となるならば其心配は無くなり、印度の如きも同様に工業國となりうるであらう。しかし、日本、支那、印度等の人々に對し廣大なる亞細亞の土地は其活動舞臺となつて、濠州やブリチンシユコロンビヤやカリフォルニアやワシントン州等へ移民するの必要を生じないであらう。

今大英國内に於ける人民について之を考へると世界人口の四分の一を有し、其白人對有色人の比は一と六である、幸に前者はブリチンシユ族が主で基督教徒であるが後の方は其民族多種多様に分かれ其宗教も亦各異つてゐる。故に今日迄の通り大英帝國が世界の經濟上に於ても軍事上に於ても、はた人種上に於ても優越な位置を保持せんとするならば、支配階級としてのブリチンシユ民族の増加繁榮と云ふことを第一義

にせなくてはならぬ。これら多數の英領内の有色人種は英國が支配したことゝの爲めに愈益々増加しつつあるのみでなく、其政治組織に於ても工業的能率に於ても何れも進歩發達を示めたのである。大戰に際し南阿聯邦内にボア人が居つたために戦争參加に若干の障害を來したことと思へば、この方面へも英人の多數を送くつて數の上でダッチ族以上に越ゆることを必要とするが如く人口稠密にして、しかも進歩的國家である日本に對し濠州の人口稀薄を患へなくてはならぬ。加奈院の人民がバンアメリカンの思想を抱かぬために加奈院へも多數の英國種の植民せんことを祈らなくてはならぬ、して見ると英本國の人口増加と云ふことがどこまでもこの大英帝國の位置を永遠に保持する第一義である。英國に於ける人口増加の趨勢は果してこの期待を空しうせざるや否や。(MF生)